

## 事例 44 絨毯は日本の量と思え

イスラム世界では、イランに限らずどこでも絨毯が織られている。

それだけに、絨毯はどこの家でも家具の一つとして使われている最もポピュラーな家具の一種であろう。

さて、この絨毯はイスラム世界の人たちのあいだでどう受け止められているのであろうか。

イランの絨毯はかつてバブルの時期に日本でも多く取引され、ペルシャ絨毯をもっている家庭も少なくない。

しかし、日本の絨毯の価格はバブルの時期に主に取引されたこともあって、全く国際価格とはかけ離れたものになっていた。

そうは言ってもペルシャ絨毯はものによっては非常に高価であることは確かであり、地域によっては絨毯そのものが財産となっていることも事実だ。

欧米にもペルシャ絨毯が入っているが、どうやら、欧米の絨毯に対する考え方とイスラム世界のそれとのあいだにはだいぶ差異があるようだ。

日本人は外国、中でもアメリカの映画の影響で、絨毯を使う生活スタイルとはアメリカのスタイルが一般的だと考えている節がある。そうしたことが駐在員にミスを犯させているようだ。

駐在員になってまもない沢田が、取引相手のハーリドの家庭に招かれ、夕食をごちそうになることになった。

ハーリドの家は典型的なアラブ・スタイルで内装が統一されていた。

床には豪華なペルシャ絨毯が敷かれ、巾木にはタイルが張り詰められ、天井にはシャンデリアがつるされていた。

応接間の周囲にはクッションがおかれ、客はそこにゆったりと腰を下ろすスタイルだ。

沢田は応接間に入り、しばらくの間あまりにも豪華な部屋の様子を唾然として眺めていたがその後で、自分がどうこの部屋で振舞うべきか迷った。

あまりおろおろすれば、相手にこちらの程度が低いとみられてしまうかもしれないと思った沢田は、部屋に入ってすすめられるままにクッションのところまで進んで行き、腰を下ろした。

しばらくするとハーリドの友人たちも加わり、夕食が供されることになったのだが、食事はその応接間で行われた。

楽しい一夜を過ごしたはずなのだが、沢田はなんとなく自分の今夜の振る舞いに間違いがあったような気がしてならなかった。

## 〔対応策〕

中東に出かけてみて最初に気が付くことは、街がゴミで汚れていることだろう。

しかし、いったん個人の家庭に呼ばれて訪問してみると、家の中がきれいに飾られているし、整理され、掃除が行き届いていることに気がつく。

そうした状態を見て日本人は彼らが身勝手であり、自分のことだけを考えていると判断する場合もある。

その判断が正しいか否かは別にして、彼らが自分の家をきれいにしておきたいと思うことを他人の日本人が邪魔する権利はあるまい。

さて、その家具のなかでも最もポピュラーな絨毯だが、前述のように絨毯は財産であり、実用品でもある。

その区別がつかず、財産として所有している絨毯を実用のもので判断したら、相手は不愉快になってしまうということだ。

アラブ人の家庭に招かれた場合、絨毯が敷き詰められてある部屋に案内されたとき靴を脱ぐべきか否かをたずねると、たいていは「そのまま結構です」という返事が返ってくる。

しかし、相手がそう言ったからといって、靴のまま上がり込むべきではない場合があることを頭に入れておくべきだ。それは彼らがこちらに気を使い、そう言っている場合があるからだ。

靴のまま上がり込むべきか、否かの判断は、敷いてある絨毯の質を見てすることが考えられるが、基本的には靴を脱いで上がることだろう。

靴を脱ごうとするとき、もし本当に靴を脱ぐ必要がないのであれば、それを止めるだろうし、靴を脱いだほうがいい場合は何も言わずにおくだろう。

アラブの食事は、最近では欧米式に椅子とテーブルで行われる場合が多くなってきているが、応接間で床に腰を下ろして行われる場合は、靴を脱ぐのが常識となっている。

第一、靴を脱がずに床で食事をするのはそれ自体が苦痛だし、不潔でもある。

また、絨毯の掃除は決して簡単ではないことを考えると、やはり靴は脱いで上がるのが相手に対する礼儀であろう。

高級な細かい織り目の絨毯に泥や土がしみ込んだり、詰まったりしてはせっかくの絨毯が台なしになるからだ。

アラブでは日本と同じように絨毯を畳のように考え、靴を脱いで上がる習慣があることを忘れないことだ。